

民族誌博物館の現在

国立民族学博物館教授

飯田卓
いたく たく



ドイツ東部にライプチヒという町がある。人口は約60万人。日本にもよくありそうな大都市だが、その歴史は古く、12世紀以来、東ヨーロッパの各都市との貿易が行なわれてきた。大学も15世紀にまでさかのぼる。旧市街区は環状の車道に囲まれ、内部は自転車か徒歩による通行がほとんどである。

英国で産業革命が始まった頃、ドイツにはまだ統一国家がなかったが、ライプチヒでは経済が芸術文化を力強く後押ししていた。その一つの表れが、バッハやシューマン、メンデルスゾーンといった音楽家を輩出したことである。そしてもう一つは、各地の文化に関する想像力をかきたてる、民族誌資料（オブジェクト）が世界中から集められたことである。ニューギニアの彫刻、スリランカの仮面、台湾の船これらの資料は、初期の風変わりなヨーロッパ楽器などととも、グラスシ博物館に展示されている。

民族誌資料、あるいはそれを展示する民族誌博物

民族誌博物館がドイツそして欧州各地に建てられるようになってから、200年が経つ。その間、文化の捉え方が大きく変わった。文化とは、感受性の高い若者たちが、同世代の刺激を受けながら創造するものであり、その文化的背景にかかわらず、誰もが享受できるという考え方である。日本のマンガは浮世絵の伝統を背景に生まれたといわれるが、いまでは世界中で親しまれ、各国に作家がいる。日本で民族誌博物館がほとんど作られなくなった原因の一つに、それぞれの民族固有の文化的背景は掘り下げられる必要はない、という考え方が大きく影響しているのではないかと。



グラスシ博物館の東南アジア民族誌展示

館は、日本ではあまりなじみがないかもしれない。私の勤務する国立民族学博物館(民博)は1974年に創設され、1977年に開館した。その後、ドイツと同様に日本でも民族誌博物館が各地に建設されてよかつたはずだが、全世界をカバーするほどのコレクションを築くのは容易でなく、東京国立博物館や福岡アジア美術館などが民族誌資料をコレクションの一部として所蔵するほか、北海道の国立アイヌ民族博物館や都道府県立の博物館などがその地域や文化を限定してコレクションを築いた程度である。

一方、ドイツ各地では、多くの民族誌資料が集められた。その理由は諸説あるが、多くの説が共通して認めるのは、ドイツ人は文化が特定の土地に根差すことを重視するという事実である。自国の価値観とは異なる文化・民族が世界中に散在しており、それぞれの民族誌資料は価値があり、鑑賞に値する、と捉えたのである。

だが、民族誌博物館は、今でも創造性の源泉である。例えば、アイヌ文化を描いた『ゴールデンカムイ』や中央アジアを舞台とする『乙嫁語り』など、民博のコレクションに関心を寄せる作家たちが、優れたマンガ作品を生みだしている。とはいえ、展示場に来ればすぐに着想が得られるというわけではない。創造的着想というものは、一つの大きな体験だけではなく、小さな体験の積み重ねから生まれるものだろう。私もドイツ各地の博物館を回ってみて、日本で考えていた様々な事柄を深く理解し、文化の意味について表現する着想を得た。これまで研究し続けてきた文化遺産の問題と関連させて、広く発信していこうと考えている。

最後に、民族誌博物館を楽しむコツを一つ。それは、展示されたモノ一つ一つの背後にある文化について知ることである。作家の池澤夏樹は、著書『見えない博物館』(2001年、平凡社)で、「国立民族学博物館の悲しさは忘れがたい」という一文とともに、展示された資料がもはや誰にも使われないことを嘆いている。20世紀の日本の農村で使われていた道具の多くは、現在使われておらず、その意味では「生きた文化遺産」ではないかもしれない。しかし、その背景を知ってインスピレーションを受けることも、「使う」うちに入るのではなからうか。

民博は来年2027年には開館50周年を迎える。こうした創造的着想を少しでもお手伝いできるような民博は、一つ一つの資料が持つ文化的背景を、今後も紹介していくつもりである。

時の調べ
Essay

略歴
国立民族学博物館教授。専門は生徳人類学、アフリカ地域研究、日本人類学史、文化遺産の人類学。著書に『身をもって知る技法——マダガスカル漁師に学ぶ』(2014、臨川書店)、編著書に『文化遺産と生きる』(2017年、臨川書店)、共編著書に『ファシズム期の人類学——インテリジェンス、プロバガンダ、エージェント』(2025年、風響社)